Osaka University Knowledge Archive

Title	集団保育場面における幼児の共同注意に関する発達行動学的研究
Author(s)	岸本, 健
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49166
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【10】

氏　　名	岸　本　　健（きし もと たけし）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学 位 記 番 号	第　２１７１０　号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	**集団保育場面における幼児の共同注意に関する発達行動学的研究**
論文審査委員	（主査） 教 授　南　　徹弘 （副査） 教 授　三浦　利章　　教 授　中道　正之　　教 授　日野林俊彦

論 文 内 容 の 要 旨

第１章　序論

他者と自分とが同じ対象に注意を向けることを「共同注意」という。共同注意により、ヒトは他者との間で対象物に関する情報をやりとりすることが容易となる。本論文は 18 ヵ月齢から 4 歳齢までの幼児の共同注意を検討し、⑴児の指さしに養育者がどのように応答するか、⑵同年代の仲間の間で、共同注意による情報のやりとりがどのように展開されるかを調べた。

第２章　幼児の指さしと保育士の言語的応答

【目的】児の指さしの頻度は後の語彙量と関連するといわれてきた。その理由は、児の指さしに対し、養育者が児の語彙獲得の足場となる応答を行うからであると考えられてきた。しかしながら、これまでこの問題に関する研究はほとんどなされてこなかった。そこで本章において、第１節では、児の指さし後、養育者が児の語彙獲得を支援するような言語的応答を行うかを検討し、第２節では、児が指さしによって、養育者から言語的応答を得られるように行動するかを検討した。

【方法】本論文の研究は全て、大阪市内 S 保育園で実施された。13 名（男児 7 名、女児 6 名）の児と保育士 4 名を対象として、児が 18 から 21 ヵ月齢までの間に、20 分間の個体追跡を 1 セッションとし、児 1 名につき 16 セッション、総計 4160 分の行動観察を行った。観察は 2 セッション毎のペアとし、互いがもう一方のセッションの統制群となるように、ペアの観察セッションは 1 週間以内に実施された。また同一ペアの各々の観察セッションは同時刻に開始された。観察セッション中に児が指さしを行うと、児が何を指さしたか、ならびに児から約 30 cm に保育士が近接していたかを記録した。そして、児の指さし後 120 秒間を指さし後場面（Post-Pointing ; 以下 PP）とし、指さしを行った児に対する保育士の発話を記録した。保育士の発話は内容から「対象物に関する発話」「幼児に関する発話」「保育士自身に関する発話」に分類され、対象物に関する発話は「命名」「質問」「説明」に分類された。児の指さしの生起時刻と同時刻から 120 秒間をペアのもう一方のセッションから抽出し、統制場面（Matched-Control ; 以下 MC）とした。MC においても、児と保育士との近接の状況、ならびに保育士の発話を記録した。

【結果と考察】PP において保育士が児に発話を行うまでの時間の分布は負の指数分布に近く、MC の分布と顕著に異なった。すなわち、保育士は通常場面と比較して児の指さし直後に最も多くの言語的応答を行っており、その後言

語的応答は時間経過とともに減少した。また、保育士の言語的応答の約 7 割は「対象物に関する発話」であった。すなわち、保育士は児の指さしに対し、児の指さした対象に関する情報を応答した。さらに、児の指さしに発声が伴わない場合、保育士は児に質問する割合が高かった。このことより、保育士は児が指さした対象を知っているか探りつつ応答すると考えられた。以上により、児の指さしに対し、養育者は児の語彙獲得の足場となる言語的応答を行うことが明らかとなった。

児が指さしによって保育士から言語的応答を得られるように行動するならば、児は保育士の言語的応答の生起しやすい状況で指さしを行っていると考えられる。そこで、児の指さしに対する保育士からの言語的応答の多寡を決定する要因として、児と保育士とが近接しているかどうかに着目し、分析を行った。その結果、保育士は指さした児と近接していた場合に高い割合で言語的応答を行うことがわかった。さらに、児が指さしたときに保育士と近接していた割合は、MC 開始時と比較して高かった。つまり指さしの際、児は高い割合で、保育士の傍にいることが明らかとなった。以上より、本章では児が指さしにより保育士から語彙獲得の足場となるような言語的応答を得ていることを検証でき、さらに児がそういった言語的応答をより多く得られるよう行動していることが明らかとなった。

第３章　幼児の仲間同士の相互交渉において見られる幼児間の注意の共有

【目的】他者と相互交渉を行う上で、相手の行動の目的を把握するには、相手の視線を追従する必要がある。また、共同で特定の対象に関わるには、他者の注意を特定の対象へと誘導しなければならない。これらの行動の発達は、児が養育者を相手とした場合の実験室実験によってしか検討されていない。本章では、保育園における日常の児同士の相互交渉で、児がこれらの行動を行っているかどうか確かめることを目的とした。第 1 節では、3 歳齢児が他児の視線を追従するかを調べた。第 2 節では、他児の注意を誘導する行動が、3 歳齢から 4 歳齢にかけてどのように発達するかを調べた。

【方法】第 1 節の実験対象は 3 歳齢児 22 名（男児 13 名、女児 9 名）であった。実験者は教室内で約 30 cm の距離で向き合い座っている 2 名の児を発見し次第、一方の児の背後約 1 mに移動した。そして実験者に背を向ける児を観察対象児、実験者の方向を向く児を手がかり呈示幼児とし、手がかり呈示幼児の注意を喚起するために人形を呈示した（185 試行）。統制条件において実験者は、1 名で座る児を観察対象児とし、対象児の背後約 1 mの位置でおもちゃを呈示した（62 試行）。実験条件は Gaze perceived 条件（手がかり呈示幼児が人形を見て、さらに観察対象児がその視線に気づく）、Gaze not perceived 条件（手がかり呈示幼児は人形を見ているが、観察対象児がその視線に気づかない）、No gaze 条件（手がかり呈示幼児が人形を見ない）に分類された。分類された各々の実験条件と統制条件で、人形呈示後 10 秒間に観察対象児が人形の方を見たかが記録された。

第 2 節では、第 1 節における手がかり呈示幼児のうちの 18 名（男児 9 名、女児 9 名）の行動に着目した。具体的には、手がかり呈示幼児が人形を発見した後、5 秒以内に「指さし」「姿勢の変化」「発声」を行った割合を算出した。また、手がかり呈示幼児の発声の内容を文節ごとに分解し、「ラベリング」「位置情報」「見ることを促す発話」「相手の名前」「状態の叙述」「叫び声」に分類される文節が出現した割合を算出した。さらに、第 1 節と同様の実験を、手がかり呈示幼児が 4 歳齢に至ってから再び実施し、手がかり呈示幼児の行動データを収集した。実験は 3 歳齢時に計 100 試行、4 歳齢時に計 61 試行実施された。

【結果と考察】第 1 節における実験の結果、観察対象児は Gaze perceived 条件において、他の条件より高い割合で背後の人形を見た。また観察対象児が人形を見る割合は、手がかり呈示幼児が発声や指さしなど、相手の注意を誘導する行動を行った場合と、視線のみを人形に向けていた場合で違いがあるとはいえなかった。これらより、観察対象児は手がかり呈示幼児の視線を追従し、背後の人形の方を見たと考えられた。以上より、3 歳齢児は仲間の視線を追従することが示された。

第 2 節の分析の結果、手がかり呈示幼児が指さしと発声を行う割合は、3 歳齢から 4 歳齢にかけて増加した。手がかり呈示幼児が「状態叙述」「位置情報」「見ることを促す発話」「相手の名前」を発する割合も、3 歳齢から 4 歳齢にかけて増加した。これらの結果から、他児の注意を誘導する行動は、3 歳齢から 4 歳齢にかけ、他児の注意をより効果的に対象へ誘導できるように発達的に変化していた。以上より、本章ではこれまで検討されてこなかった、仲間同士で生起する共同注意の発達を初めて明らかにした。

第４章　結語

本論文では、⑴18 ヵ月齢児が指さしを行うと、養育者が児の指さした対象に関連した言語的応答を行うことを検証し、さらに児が養育者からそういった言語的応答をより多く得られるよう行動していることを明らかにした。つまり、児の指さしと語彙獲得とが関連している理由として、児の指さしに対し、養育者が児の語彙獲得の足場となる応答を行うからであることを実証することができた。また、⑵養育者と比較して相互交渉を行うことが難しいとされる同年代の他児を相手にした場合においても、3 歳齢児は視線の追従を行うことが明らかとなった。さらに、3 歳齢から 4 歳齢にかけ、児は自分の注視している対象へと同年齢の他児の注意を効果的に誘導するように発達することが確かめられた。本研究から、幼児と保育士間、および幼児間にみられる共同注意が、語彙の獲得などの言語発達や社会性発達と深く関連することが明らかとなった。

論文審査の結果の要旨

近年、乳幼児期における共同注意（ジョイント・アテンション）の研究は、いわゆる心の理論の研究とも結びつき、人間の初期における社会的発達の研究において重要な役割をはたしている。本論文は、保育園の自由遊び場面における幼児や保育士の発話や行動を詳細に分析し、共同注意の発達の一側面を明らかにすることを目的としてなされたものである。申請者は、幼児を観察対象として長期にわたり行動をビデオ撮影し、本研究では指さしや他児の視線の追従行動を中心に分析した。

本論文では、

⑴18 ヵ月齢児が指さしを行うと、保育士が幼児の指さした対象に関連した言語的応答を行うことが多いことを検証し、さらに保育士は指さした幼児と近接していた場合に高い割合で言語的応答を行うことを証明した。これらにより、幼児が保育士から言語的応答をより多く得られるよう行動していることを明らかにした。つまり、従来から指摘されている幼児の指さしと語彙獲得が関連している理由として、幼児の指さしに対し、本研究における保育士のような立場の養育者が幼児の語彙獲得の援助となる応答、いわゆる足場作りを行うからであることを実証した。

また、⑵保育士と比較して相互交渉を行うことが難しいとされる同年代の他児を相手にした場合においても、3 歳齢児は視線の追従を行うことが明らかとなった。さらに、3 歳齢から 4 歳齢にかけ、幼児は指さしや発声などを用い、自分の注視している対象へと同年齢の他児の注意を効果的に誘導するように発達することが確かめられた。

本研究から、幼児と保育士間、および幼児間にみられる共同注意が、語彙の獲得などの言語発達や社会性発達と深く関連することが明らかとされた。

申請者は、本論文において保育園という生活場面で、創意工夫に富んだ実験的場面を設定し、統制場面との比較から幼児の共同注意を詳細・精緻に分析し、幼児の共同注意行動の発達に新たな知見をもたらした。これらの知見は、国際的にも評価されている。

以上の理由により、本論文は博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと認定した。